

# 都市近郊林の協働的管理の実現に向けたアクションリサーチ

兵庫県立大学 経済学部 三俣ゼミナール

川添 拓也 福永 沙羅 柳川 恵理子 山本 敦士 吉田 遥香

## 1. 研究の背景および本稿の目的

筆者らの実施した昨年度の研究では、地域住民による共同作業が神戸市北区下唐櫃地区においてなお存続していること、およびその森林管理上の意義を明らかにした（柴田ほか，2015）。そのような地域共同の作業は、同地区においては「お役」と呼ばれているが、しかしこのお役だけでは長引く林業不況にあって限界がある。とりわけ、お役に出る人の高齢化はもとより、地域の森林に関心を寄せる後継者不足は深刻の度を増している。森の維持管理が今後さらに困難になることは容易に予想される。このような課題に応えるものとして、伝統的な地域が今後いかにして地域内外の主体と連携関係を構築しうるかが重要になるという結果を昨年での研究で示した（柴田ほか，2015）。

同課題についてさらに研究を深化させることが本研究及び本論文の目的であり、より具体的には、県や市といった行政、教育部門（学校）などの連携主体が地域と連携する為の条件を検討する。このような研究を実施することによって、経済林としてだけではなく、森林の多様な価値を引き出す為に必要な社会制度的条件を導出することができる。これは同時に「森林を活かす」まちづくりへの示唆を与えうると考える。

## 2. 調査の方法

地域住民とその外部アクターの協業を通じ森林をいかに管理していく道があるかを検討するため、地域内部の分析においては、昨年同様、下唐櫃林産農林組合有林を研究対象に据える。他方、外部アクターとしては、実際に同地域に関わりを持っている神戸市、兵庫県立大学三俣ゼミナールなどの可能性等を検討するが、これだけで内外の協業可能性を検討するには十分ではない。そこで、六甲山を中心としつつ他地域の事例にも目をむける。外部者が森林の価値や機能をいかに認識し、森林に実際アクセスし、さらには管理につながるアクターになる道筋を検討するため、森林を教育の場で活用する小学校（妙法寺小学校）、森林の癒し効果を楽しむハイカーたち、多様なアクターが地元産材の利用促進を図る篠山市の動向を追う。これらの調査は、筆者らのそれぞれの卒業論文としてまとめられたものであり、調査の方法も、それぞれ異なるが、概ね、聞き取り調査、文献考証、アンケート調査である。詳しくは末部、参考文献を参照されたい。

### 3. 現地調査結果

神戸市下唐櫃地区の森林の利用と管理に大きく関わる、神戸市下唐櫃林産農業協同組合と下唐櫃まちづくり協議会への聞き取り調査より、外部からの必要とされるアプローチとして、①教育的利用について、②木材的利用について、③外部アクターと森の関わりについての3つが挙げられる。

①教育的利用について、現在神戸市北区下唐櫃地区では、森林に最も近い存在でありながら、地域の子どもたちにとっての森林教育の場としての活用が行われていない。過去に行われていた時期もあるが、林業の危険性の問題から活動に十分な協力ができなかった。森林での林業作業による事故などを考えれば、児童・生徒を受け入れ教育的な森を創出していくことは容易ではない。

一方、著者のうち吉田の進めた神戸市立妙法寺小学校の研究では、全ての学年で学校林（以下自教園と呼ぶ）を利用していることが分かった。

同小学校ではそれぞれの学年に合わせて、自教園を利用するカリキュラムが毎年組まれている。教科利用では、国語・算数・理科・社会・図工の5教科において幅広く利用されているという点に大きな特徴がある。

聞き取り調査および教員、保護者へのアンケート調査からわかったことは、妙法寺小学校では自教園活動に協力している保護者の存在が大きいということである。これは、成長過程における自然教育の必要性を感じ、自教園活動を存続していくことについて理解を示している保護者がほとんどであることを示している。また、問題点として「管理・維持」と「資金面」が挙がっていたが、保護者による草刈りへの参加や羊の購入などから協力的であることがうかがえる。しかしながら、「管理・維持」「資金面」の問題について知らない保護者が多くいることも事実である。さらに、学校林活動の中核を担う理科教員以外の教職員にとっては「自然教育への専門性のなさ」によって「事前準備」の負担が大きいこともわかっている。教育の場で地域の森を活用するための条件として、上述した課題を念頭に置く必要がある。

②木材的利用について、神戸市北区下唐櫃地区では過去に製材所も近くにあり木材を搬出していたが、現在は製材所もなく、山から製材所まで搬出するのにも費用が大きくなるため、収益がほとんどない。そこで興味深い事例として、筆者のうち福永は地元産材の利用を促進し、森林及び林道整備を進めている「篠山市ふるさとの森づくり推進体制」を制定した篠山市の事例を研究した。

その中でも木を木として活用する木質化の動きが活発であり、小学校・認定こども園の木質化や、まちの看板を木製にして活用するなど、大小さまざまな例で木質化が進められている。この動きの中で、近年経営状態が悪化していた製材所での篠山産木材利用が活発化され、間伐面積が増加するなど、実際に森林整備促進の動きが見受けられる。

2015年11月に実施した調査の際、篠山市役所の細見氏及び藤本林業所の藤本氏の話で印象に残っているのが、「地元産木材を使うことは、利益が出るからするのではない。地元のためにやらなければならないからするのだ。」という言葉であった。現段階では地元産木材を活用しても利益が出ず、むしろ赤字を被ることすらあるが、それでも地元産材を使わなくては、地元の林業及び森林整備が衰退の一途をたどる。だから活用しなければならない、と回答していた。そのようなボランティア精神のみではなく、確固たる基盤の上で事業として成り立つようにするためには、①木質化のコストを削減し、木質化推進への障壁を取り除くこと、②建築物の木造化・木質化の需要を引き出すこと③木材の供給体制の整備し、安定供給できる体制を整えることの3点が存在していることが判明した。唐櫃の山林への示唆は、行政と民間の協業において良い意味での距離感を構築することの重要である。

③外部アクターと森との関わりについて、国や行政の施策、教育的利用の促進に加え、森へのアクセスを通じて、その多様な価値を創出していくことも重要である。その前提として、そもそも、「外部者が都市近郊林の価値や機能をどの程度認めているのか」ということについて調査するために、神戸市六甲山にて登山会をはじめとした来訪者に対して森林の癒し効果についてのアンケートを行った。その結果、9割以上の方が気分の落ち着きや回復感の向上といった森林の癒し効果が得られていることが判明した。また、普段から森にアクセスする人の7割以上の方が癒し効果を求めていることも判明した。

#### 4. 考察—今後の展望

今後、下唐櫃地区ではローカルレベルでの価値の再構築、再構成が必要になる。そのためには外部アクターがかかわることの最大のメリットがあるといえるかもしれない。一見、内部では気付かないような価値や機能を外部アクターの気づきにより再発見できるからである。同地域に関わりをもって神戸市・兵庫県立大学三俣ゼミナールといった外部アクターやその他の外部アクターとの協業のために、都市近郊林という重要な意味を持つ唐櫃の森において3つの展開方法が考えられる。

まず、唐櫃の森には人工林が多く、作業道などといった行政の補助が重要となってくるため、林業的価値をいかに創出するかという工夫が必要である。なぜならば、作業道の整備は、森林整備が行いやすくなる他に、椎茸や桜葉やしきみの栽培場所として有効であり、下唐櫃の新たな名産物を産み出す契機になることも考えられる。さらには森林散策、キャンプなどの森林レクリエーションにも利用されることにもつながり、地域の活性化に貢献するのではないだろうか。

次に、下唐櫃の小学校とのリンク。あるいは小学校以外の教育部門でもつながる可能性がある。例えば、三俣ゼミナールでは、2014～2015年に下唐櫃地区でのフィールドワーク（伐採体験や森林施業の様子を見学）を行っている。地域住民、組合員らが小学生や中学生といった子供たちと関わり合

い、森を通じて関わることができれば、そして自らの生活に大きくかかわる森林や林業の魅力を彼らに伝えることができれば、森林や林業に興味を持つ子どもたちも増えるに違いない。これこそが、下唐櫃の森林を支える人々の持つ可能性ではなからうか。

さらに、唐櫃の森では散歩者の往来が多く、また私たち三俣ゼミ生も調査の際に何度も唐櫃の森には足を運んでいる。これまで利用している道を散策道（フットパス）として歩ける道や手作り標識などを制作し、安心して山を歩けるような道を創出することは新たな価値の創出につながると考えられる。

県や市といった行政、教育部門（学校）などの連携主体が地域と連携する為に、これらの取り組みが価値の再構築につながる有効な手段ではないかと考えられる。

## 参考文献

川添拓也・山本敦士（2016）『都市農山村地域における森林利用と管理—神戸市北区下唐櫃地区の事例から—』兵庫県立大学経済学部学士論文。

福永沙羅（2016）『公共建築物等における木材利用促進の現状と課題—兵庫県篠山市の事例から—』兵庫県立大学経済学部学士論文

柳川恵理子（2016）『都市近郊林の持つ‘癒し効果’についての検証—六甲山来訪者に対するアンケート調査に基づいて—』兵庫県立大学経済学部学士論文

吉田遥香（2016）『神戸市立妙法寺小学校の学校林利活用・管理実態—保護者・教職員へのアンケート調査に基づいて—』兵庫県立大学経済学部学士論文

## 謝辞

今回の研究にあたり、神戸市下唐櫃林産農業協同組合長吉田進氏、神戸市建設局防災部防災課六甲保全係長尾添順氏、同じく田村悠旭氏、まちづくり会社地域計画代表安田正氏、同じく川本令子氏、そして前自民党神戸団長の福浪睦夫氏、神戸市立妙法寺小学校の教職員である栗林則夫先生、篠山市役所農都創造部農都環境課の細見英志氏、篠山森林組合の代表理事組合長の加藤哲夫氏、藤本林業所の藤本清仁氏には筆者による聞き取り調査を快諾していただき、貴重なお話を伺うことができた。記して感謝する。